

## Nueva Españaの歴史の証人としての Alexander von Humboldt

### Alexander von Humboldt as a Historical Witness for Nueva España

佐々木 博  
Hiroshi SASAKI

#### Abstract

This article dealt with the route and visiting sites of Alexander von Humboldt research journey in Nueva España for 5 years (1799-1804). He is very famous for a natural scientist as a founder of various branches of natural sciences. But, he must be evaluated as a observer, watcher and witness of economy, politics and social structure in Nueva España. He hates the slavery and the unequality of human right among nations in Nueva España. His work "Essai Politique sur le Royaume de La Nouvelle-Espagne" must be the first modern Länderkunde (Regional Geography) which treats not only physical environment, but agriculture, mining, manufacturing, trade, social structure and politics in Spanish colonial countries.

**キーワード**：ヌエヴァ＝エスパーニャ、コンキスタドール、エンコミエンダ、アシエンダ、クリオーリョ

**Key Words**：Nueva España, conquistador, encomienda, hacienda, criollo

- I はじめ
- II コロンブス以降の中南米の探検・征服
- III Nueva Españaの支配体制
- IV フンボルトのNueva España探検旅行（1799-1804年）
- V フンボルトの見たNueva España
- VI 歴史の証人としてのフンボルトの価値
- VII おわり

## I はじめ

フンボルトは1799年6月5日、スペイン北西部のLa Coruñaをスペイン軍艦Pizaroで出航してから、1804年8月3日、フランスの軍艦Favoriteでボルドーに帰還するまでの5年2ヶ月を新大陸で過ごした。最後の50日間のアメリカ合衆国訪問を除くと、約5年間はスペイン王国の植民地ヌエヴァ＝エスパーニャNueva Españaを探検旅行した。年齢は29才9ヶ月から34才11ヶ月にかけてであった。

かれがヨーロッパへ帰還した翌年1805年、スペイン南西端カディス軍港南南東40km、トラファルガー岬沖でフランス・スペイン連合艦隊がネルソン提督率いるイギリス海軍に大敗し、ナポレオンがスペイン宮廷の勢力争いに乗じて実弟ジョゼフ＝ボナパルトをスペイン国王に据えた。これを機にヌエヴァ＝エスパーニャで独立運動が活発となり、最後に「南アメリカ大陸解放の父」シモン＝ボリーヴァルSimón Bolívar（1783-1830）が独立戦争の総仕上げをすることとなった。ボリーヴァルは1804年8月パリと、翌1805年5月1日ローマで、2度フンボルトに会っており、フンボルトを「第2のコロンブス」とか、「フンボルトはスペイン人が新大陸でなしとげたなによりも多くのことをなしとげた」と尊敬の念を込めて評価している。

フンボルトは自然科学者で中南米の自然景観を調査研究して、今日の自然地理学・岩石鉱物学・生物学・生態学・天文学・地磁気学・海洋学などの嚆矢的研究書を数多く残しているが、ヌエヴァ＝エスパーニャの政治システム・産業・人種・民族・人間関係をよく観察し、とくに奴隷制に対しては怒りと嫌悪感を抱いていた。5年間にもわたる自由な調査を許可してくれたスペイン王への配慮から、公式には奴隷制や植民地支配体制を批判することは慎んできたが、当時親しい友達に宛てた書簡やかれの日記に書かれた内容が公表されるに従い、独立前のヌエヴァ＝エスパーニャの歴史の証人としてのフンボルトの観察の記述は非常に貴重であり、紹介・分析・考察に値する。

## II コロンブス以降の中南米の探検・征服

ジェノア生まれの コロンブスChristopfer Columbus（1451-1506）は地球は丸く、西へ航行して行けばインドに到達できると信じ、フランシスコ会修道士の紹介で、スペイン女王とフェルナンド国王から一度は断られたものの、再度アジアへの新しい航路発見の探検計画を提案し、1492年1月グラナダのアルハンブラ宮殿陥落直後に認められた。1492年8月3日、コロンブスはスペイン南西端Tinto川河口左岸Paros港から旗艦サンタマリア号を含む3隻で出航し、カナリア諸島を経て10月12日バハマ諸島南東端サンサルバドル（ワットリング）島に到着した。さらにキューバ・ハイチ島を発見し、そこがインドだと信じ、その原住民をインディオindio、その地域をインディアスIndiasと呼んだ。翌年1493年3月15日、コロンブスはリスボンに帰還し、4月バルセロナにいるイザベル女王・フェルナンド王の2王に、持ち帰った色鮮やかなオウム・金・連れ帰ったインディオを献上し、大歓迎され、「大海の提督、インディアスで発見した島々の副王にして提督」に任命された。新航路発見の成功によって、第2回航海

(1493-96)には多くの探検家や出資者が集まり、1493年9月には千数百人を乗せた17隻の大船団がコロンブスを指揮官としてスペイン南西端カディス港を出港し、小アンチール諸島・ブエルトリコ島・ジャマイカ島を発見した。第3回航海(1498-1500)では南アメリカ北東のオリノコ川河口・トリニダード島を、第4回航海(1502-04)ではホンジュラス・ニカラガ・コスタリカ・パナマ沿岸を探検した。

コロンブス以降、1500年にファン＝デ＝ラ＝コサがコロンビアからパナマ沿岸を航海し、この地方に金が採れるとの情報を得た。1509-11年、コロンブスの第2回航海以来何度も南米を探検したアロン＝デ＝オヘーダが、コデラ岬(カラカス東方)からパナマ東方ウラバ湾G. de Urabáまでの探検・開拓権を王室から認可された。エスパニョラ島(現ドミニカ共和国のある島)に1496年建設された植民都市サントドミンゴの裕福な市民ディエゴ＝デ＝ニクエサは、ウラバ湾からパナマのベアグア地方までの権利を認可された。バルボアVasco Núñez de Balboa(1475-1517)はコロンビアとパナマの境界付近に造られた植民都市サンタマリア＝ラ＝アンティグア＝デル＝ダリーエンを拠点に探検に出かけ、1513年、ダリーエン地峡を横切って「南の海Mar del Sur」：太平洋をヨーロッパ人としては初めて発見した。

1517年2月8日、フェルナンデス＝デ＝コルドバが奴隷狩りの目的で、キューバ島南東端の植民都市サンティアゴから島の北岸に沿って西航し、ユカタン半島北東端でマヤ文化を発見し、メキシコへの征服が始まった。1518年にはグリハルバがサンティアゴからメキシコ北東部ロホ岬からタンピコ付近まで航行した。1519年にはマヤ文化を征服破壊したコルテスHernán Cortés(1486-1547)が、サンティアゴからキューバ島の南岸に沿って西航し、ユカタン半島に沿って西航してベラクルスの都市を建設して、陸路マヤ文化の本拠地テノチティトラン(今日のメキシコシティ 海拔2277m)へ攻め入り、メシカ兵3000人を大虐殺して1521年8月13日マヤ文化の本拠地テノチティトランを陥落させた(増田 2002)。マヤMayaとは特定民族集団を指す概念ではなく、マクロ＝チブチャ語マヤ語族に属する約30の言語のいずれかを用いるインディオを総称する便宜的用語である。その地理的範囲はユカタン半島を含むメキシコ南部・グアテマラ・ベリーズ・ホンジュラスの一部で、九州を除いた日本の面積に近い。現在のメキシコシティを首都とし、コルテスに亡ぼされた文化はアステカAztecaと呼ばれるのは、かれらの伝説上の起源地アストランAztlanの人を意味する。しかし、アステカ族はのちにメシトリ神をあがめる人を意味する「メシカMexdica」と称し、それから今日の国名メヒコまたはメキシコがでている。メシカ族はメシカ王国の都の名を取ってテノチカとも称し、12世紀初頭に起源地アストランを離れて、13世紀にメキシコ盆地に移動していた。

無学文盲のピサロFrancisco Pizarro(1475ころ-1541)は、1502年にスペインから渡ってきたコンキスタドルconquistador(征服者)で、バルボアの探検に参加している。ペルラス諸島に滞在中にビルーもしくはベルーという名のエルドラードeldorado(黄金郷)の情報を得、パナマの司祭エルナンド＝ルケとディエゴ＝デ＝アルマグロと一緒に1524年と1526年の2度予備調査の後、スペインに戻りトレドで国王と協定を締結し、ヌエヴァ＝カステリヤ(ペル

一) 総督に任命され、生地トルヒーリョからエルナンド・ゴンザレスらの兄弟を参加させて、1530年1月パナマに向かった。1532年11月16日、カハマルカ(海拔2622m リマ北北西900km クスコ北西1200km)でのインカ帝国国王アタワルパとピサロとの会見で、ふいに襲ったピサロ軍の攻撃で、わずか30分あまりで6000~8000人のインカ兵が虐殺された。1533年11月15日アンデス山中海拔3249mにあったインカ帝国の首都クスコにピサロは進軍した。

### Ⅲ Nueva Españaの支配体制

ヌエヴァ=エスパーニャ Nueva Españaとは文字通り「新しいスペイン」で、その意味する範囲は広義には中南米・カリブ海地域を含むスペイン人征服・支配全域であるが、あまりにも広大な地域で、支配・統治領域が区分されてゆくにつれ、狭義にはメキシコ副王領を中心とする中米地域のことである(図1)。

コルテスがベラクルスに1519年に上陸して以来、その征服地は広がり、1524年頃までにはアステカ帝国に支配されていた地域はほとんどスペイン王の支配下に入った。コンキスタドールの数はコルテスがアステカ帝国を征服した1521年に2329人、8年後の1529年に約8000人、植民地時代を通してヌエヴァ=エスパーニャのスペイン人が30万人を超えたことはなく、その4割は過剰人口を抱えた貧しいスペイン南西部のアンダルシア ANDALUCIA 地方とポルトガルと接するエストレマドゥーラ EXTREMADURA 地方の出身であった。8世紀にもわたるレコンキスタ reconquista(国土回復戦争 711-1492)が終わった直後で、多くの失業兵士があふれており、コンキスタドールを募集するには苦もなかった。多くは身も心も貧しく、一攫千金を夢みて危険を顧みず出かけていったが、成功したものはほんの一握りに過ぎなかった。成功者のコルテスが新大陸へ旅立ったのは19才で、アステカ王国征服へ出かけたのが15年後の34才の時であり、ピサロが新大陸へ渡ったのが22才時、インカ帝国を征服したときには50才になっていた。

最初の移住者はほとんど男性であったが、6%ほどの女性も混じっており、女性移住者が増えるにつれてヨーロッパの生活様式を伝播することになった。新大陸に渡航できるものは、三代にわたってカトリック信者である者に限られ、ユダヤ人・ジプシー・イスラム教徒は渡航資格がなかった。コロンブスもコルテスも命をかけて獲得した最高司令官の地位を、しばらくして国王から派遣されてきた総督や副王によって追われ、富を巡る闘争でも、王権に奪われてしまった。

1521年(コルテスがアステカ首都テノチティトランを陥落させる)から1821年(副王がメキシコの独立を承認)にわたる植民地時代の300年は、①征服・探検・開発の16世紀、②原住民人口が激減し、経済が停滞した17世紀、③新たな躍動を始めた18世紀、に分けられ、行政制度・組織は時代と場所によって一様ではない。

コルテスもアステカ帝国征服の翌年1522年、国王からヌエヴァ=エスパーニャの総督兼最高司令官に任ぜられ、開拓の全権を与えられていたが、1529年、王はメキシコに司法の最高機

関である聴訴院アウディエンシア Audienciaを設置し、6年後1535年には国王の代理である初代副王 Antonio de Mendozaを送り込んでコルテスから統治権を奪った。副王にはスペイン生まれのスペイン人ペニンスラル peninsularが任命され、大半は上流貴族であった。植民地時代を通して100名余りの副王が任命されたが、植民地生まれのスペイン人であるクリオーリョ criolloはわずか5名に過ぎなかった。任期は決まっておらず、初代ヌエヴァ＝エスパーニャ副王 Mendozaは15年間務めた後、ペルー副王に任命された。アウディエンシアは司法のみならず行政・立法機能をも合わせもち、1511年にイスパニョーラ島のサントドミンゴに設置された。アウディエンシアの在任期間は一般に副王よりも長く、副王を補佐しながらも、副王の権力をチェックし、植民地支配の機関の中で最も長く存続した安定した機関であった。

**エンコミエンダ encomienda制** encomendarとは「委託・寄託する」を意味し、征服者が一定の区域のインディオをキリスト教に改宗させる代わりに、かれらに労力を提供させ、徴税し、時には軍務に動員することを、国王から委託される制度で、委託された者はエンコメンデロ encomenderoと呼ばれた。この制度はレコンキスタ reconquistaの時代にイベリア半島にできていったものであると言われている。一つの村か県ほどの大きさの土地を管理していたクリオーリョ criollo（中南米生まれのスペイン人）三代のエンコミエンダの詳細な事例研究がある（横山 2001）。大きなものになると、フランシスコ＝ピサロのもっていたエンコミエンダはペルーの海岸低地からアンデス高地にまたがり、1540年には2万7000～3万1000人の納税者をもっていた。

征服者らは征服行動の報酬としてエンコミエンダのインディオを家畜のごとく酷使し、利益を上げてきたため、カリブ海地域では征服の時代（1492～1519）に先住民のインディオが激減した。スペイン人が持ち込んだ天然痘・麻疹・流行性感冒などに対して先住民が免疫をもたなかったことも原因となっている。征服とその報酬としての国王との契約関係は、征服者と先住民との支配・被支配の関係となった。1510年にイスパニョーラ島にきたドミニコ修道会の修道士は、先住民の悲惨な状態に驚き、救済活動を開始し、先住民の奴隷化を禁止した1512年の「ブルゴス法」勅令を出させた。しかし、生死をかけた征服活動の報酬として得たエンコミエンダを支配者となったエンコメンデロが手放すことはなかった。

ラスカサス Las Casas（1474-1566）は1502年にイスパニョーラ島に渡り、従軍司祭として各地の探検に参加し、その功績に対してほかの征服者と同様にエンコミエンダをあたえられた。スペイン人達のインディオに対する非人間的な残虐な行為に対して憤慨し、自分のエンコミエンダのインディオを解放した。ヌエヴァ＝エスパーニャ南部でのキリスト教布教に従事した後、1540年スペインに戻り、1542年のインディオの奴隷化と強制労働を禁止した「インディアス新法」を成立させ、インディオは国王の臣民として位置づけられ、インディオはスペイン人に次ぐ地位を法的には与えられた。しかし、現実には植民地時代を通して、奴隷以下の扱いを受け、重い税に苦しんできた。ヌエヴァ＝エスパーニャでエンコミエンダ制が廃止されたの

は1718年であり、ユカタン半島では1785年まで存続していた。

アシエンダ *hacienda* とは大農園・財産のことで、征服者達は先住民への人頭税に加えて、インディオを過酷に酷使して共同体に労務提供させるレパルティミエント *repartimiento* 制（労働割り当て）による強制労働があった。ヨーロッパ人が持ち込んだ疫病とレパルティミエントによってインディオの人口は激減し、耕作放棄地が増えて過疎化現象が見られるようになってきた。これらの放棄地を後のスペイン入植者らは実力で占拠したり、16世紀末からは一定の金額を納税すれば占拠地の所有権が認められる政策 *composición* がとられるようになったり、所有者のいない土地の払い下げが行われるようになった。鉱山からの利益も減少して、土地への投資が盛んになり、17世紀には私的大土地所有が確立した。アシエンダは数千haから数万haの広さを有し、強大な権力を持つ大農園主が多数の農業労働者 *peón* を使ってカカオ・藍・ブドウ・柑橘・オリーブなどの商品作物を生産したが、アシエンダ内部では自給自足的社会であった。大農園主はアセングード *hacendado* と呼ばれ、ペオンとは家父長的主従関係で結ばれ、多くは優雅な都市に住み、時には外国に住んで、管理人を農園においておく様は、ヨーロッパ地中海地域に見られるラティフンディウム *Latifundien*（独）・*latifundium*（仏）・*latifundio*（西）・*latifondista*（伊）・*latifúndio*（葡）や、平安時代の日本の荘園にも似ている。

19世紀初頭からラテンアメリカ各地で始まった、スペイン王からの独立運動によって共和国が成立した（図2）ときも、大土地所有・封建制・修道会・教会・軍閥 *ボス・カウディーリョ* *caudillo* などのこれまでの旧勢力が温存され、北アメリカとは全く違った政治体制が今日まで尾を引いている。ラテンアメリカ独立の最大の英雄シモン＝ボリーヴァル *Simón Bolívar*（1783-1830）はヴェネズエラのカラカスの富裕な名門クリオーリョの家に生まれたが、1786年、3歳の時父が他界し、母も失った。家庭教師に立派な教育を受け、早くからルソー・ロック・モンテスキューなどの啓蒙思想家の著作に接し、影響を受けた。16才の時マドリッドに行き、そこで貴族の娘と熱烈な恋愛ののち結婚。1802年カラカスに戻ったが翌年1月、高熱によって妻に先立たれ、人生が変わることとなった。「妻の死がなかったら私は『解放者』にはならなかっただろう」と述懐している。1803年再度マドリッドに行き、さらにパリへ行き、ナポレオンが皇帝になったのを見て、革命を裏切ったものとして、強い幻滅を感じた。1804年8月、南米調査旅行から帰ったばかりの *Alexander von Humboldt* に会い、翌年1805年5月1日ローマで再度フンボルトと邂逅し、「イスポノ＝アメリカ植民地の独立の機が熟している」と伝えられる。ローマでモンテ＝サクロ *Monte Sacro* に徒歩で登り、「祖国をスペインの支配から解放する」ことを誓った。

ハンブルク港からアメリカ合衆国経由で帰国、1810年カラカス市議会は総監を追放して臨時政府を樹立、ボリーヴァルは独立の承認と援助を求めてイギリスに渡ったが成功しなかった。その代わり、ヴェネズエラ独立運動に失敗してイギリスに亡命していたフランシスコ＝デ＝ミランダを帰国させ、独立運動を指導させた。1811年7月5日ヴェネズエラは独立を宣言し、ボ

リーヴァルは独立軍の将校となった。7月ミランダの妥協でヴェネズエラは再びスペインの支配下に入ったため、コロンビアのカルタヘナへ行き、「カルタヘナ宣言」を発表、内部の不統一と弱体な政府が敗因である、と分析したボリーヴァルは、解放軍の司令官となり、カラカスを奪還し、「解放者」の称号を贈られた。しかし、1814年、スペイン軍に敗北してジャマイカに亡命、「ジャマイカからの手紙」でラテンアメリカの統一など、彼の政治思想を述べている。黒人共和国ハイチに向い、支援を取り付け、1819年ボゴタ北東のボヤカの戦闘でスペイン軍を破ってヌエヴァ＝グラナダ（コロンビア）を解放し、ヴェネズエラ・コロンビア・エクアドルを単一の国家とした。1824年リマ南東300kmのアヤクチヨ Ayacuchoの戦いで大勝して、イスマノアメリカの独立をほぼ達成した。1826年ラテンアメリカ諸国の連携を目指すパンアメリカ会議をパナマで開催したが、各国の利害の対立と、ヨーロッパ諸国の干渉によって失敗し、ボリーヴァルは1830年11月、結核に冒されたままコロンビアのサンタマルタで「海を掘るような真似をした」ことに絶望しつつ、47才の生涯を閉じた。

#### IV フンボルトの Nueva España 探検旅行（1799～1804年）

中南米植民地でスペイン王国から独立運動が勃発する直前に、フンボルトは5年間も Nueva España を探検旅行した（図 3）。この地を探検旅行地としたのは偶然のことであった。パリ科学界で世界一周の探検計画があり、5年間にもわたるビッグプロジェクトで、指揮はオーストリア政府の2度にわたる科学調査旅行をしているニコラ＝ボーダン Thomas Nicolas Baudin（1754-1803）で、フンボルトとエメ＝ボンプラン Aimé Bonpland（4才歳下で、ラロシエル生まれのフランス人海軍外科医で植物採集家）は採用された。しかし、ナポレオンのエジプト遠征のため国庫が底をつき、プロジェクトは中断した。フンボルトは1798年10月15日、パリのプロイセン大使館で18ヶ月有効の旅券を得、旅行目的地としてマルセイユとアルジェを記入してもらった。10月27日、両者はマルセイユに着き、北アフリカへの渡航の機会をうかがっていた。予定したスウェーデンのフリゲート艦は修理のためカデイスのドックで動かず、マルセイユ港湾当局では北アフリカ向け Visa を発給しないことを知らされる。ナポレオンの進入の犠牲者である北アフリカの首長や土侯たちが、フランス人には報復を加えると決めていたからであった。チュニジアに向かうラゲーサ Ragusa（現クロアチアのアドリア海の真珠ドゥーブロヴニク Dubrovnik のイタリア名）の船を見つけたが、乗船許可をもらわないまま見送った。これが幸いしたのは、この船は出港直後に沈没した。

1798年12月4日、スペインへ向かうことにして、ほとんど徒歩で、ニーム・モンペリエ・ベルピニアンからスペインに入り、バルセロナでは Montserrat 寺院を訪れ、ヴァレンシア経由で2月23日、マドリッドに到着。ゲーテが南国イタリアに魅せられたように、両者は地中海沿岸の鮮やかな植物相に驚愕した。スペイン王室に探検調査申請書を提出し、許可が下りるまでの間もマドリッドの植物園の温室でメキシコから導入されたばかりのダリアや蘭を見ることができた。植民地探検調査の申請書は駐マドリッドのザクセン大使の口利きによるものであった。

フンボルトは地質学者であることを強調し、植民地でまだ新たな資源が発見される可能性をおわせ、カルロス5世は探検の詳細な計画書を出させ、それも形式的な審査に過ぎないことをおわせた。4月20日と5月2日の二度、フンボルトはマドリッド南40km、Tajo川に沿うCastilla La Nuevaの高地、海拔492mにある夏の離宮アランフェスAranjuezに出頭し、5月7日付で旅券が交付された。

1799年6月5日、スペインのコルベットKorvette艦（平甲板一段砲装木造三本マスト帆船）「Pizarro」は夜になって明かりを消し、ラコルーニャ沖に哨戒しているイギリス軍艦3隻に見つからないように出航した。11日後、カナリア諸島が見えてきた。翌6月17日、フンボルトは諸島の北東端Graciosaにボートで上陸してみたが、フンボルトにとってのヨーロッパ外の初めての土地であった。出航して14日後6月19日、Teneriffa島のSanta Cruz港に入港し、6日間滞在した。3718mのPico de Teide火山に登り、植物相と海拔高度の関係を観察すると同時に、様々な観測を行った。船上はフンボルトが持ち込んだ沢山の測器や動植物採集後に剥製にしたりするための薬品類なども沢山積み込まれ、フンボルトは特別料金を払ってそれらを可能にした。Teneriffa訪問のもう一つの目的は、子供の時ベルリンの植物園で見た竜血樹（dragon's blood tree リュウゼツラン科の常緑高木 カナリア諸島原産 高さ20mに達する 最も長寿の樹で、樹齢数千年に及ぶ 幹から竜の血を連想させる樹脂を分泌）を見ることであった。ダーウィンは学生時代にフンボルトの『南米旅行』を読んでおおいに感銘を受け、在学中にTeneriffa島への旅行を計画し、それがやがてビーグル号での海洋探検に発展していった。

船長の計らいでフンボルトらは後部甲板で観察に没頭した。南半球の星座、ネズミイルカの跳びはね、トビウオ、海をバラ色に染めるクラゲの浮遊、海水温度・塩分濃度などの測定と観察であった。フンボルトの飽くなき好奇心と前向きな態度を、少し長いがガスカール・沖田訳（1989）が引用すると、次のようである。

アレクサンダーは操舵手の脇を離れずにいるこのインディオと一晩中話した。インディオはスペイン語を流暢に話したが、アレキサンダーもこの言語をマドリッドで数週間うちに習得していた。アレクサンダーはこれまで一度もインディオを見たことがなかったので、彼に日常生活や仕事のこと、その習慣や趣味、信仰について、また日頃目にする動植物について貪るように尋ねた。アレクサンダーには、このような「他人の生活の中に」入り込みたいという欲望がつかねにみられる。彼が若い男とのつき合いで見せる飽くことのない好奇心も、多分この欲望に原因を求めねばならないだろう。その場合この欲望には一種の愛情が伴っていることになるが、その性質についてはわれわれはまだ考えを巡らし終えていない。このインディオとの場合、彼の知りたいという欲望は一つの科学的思考過程、民族学研究とみなされるべきものであるが、それでも他者の特殊性——それはどんな場合も、人が思っているほどには乗り越えがたいものではない——の彼方に友愛に満ちた同一性を求めようとする姿勢がどこまでも感じられる。



旧東ドイツ時代にできたフンボルト研究所の所長Prof. Dr. Kurt R. Biermann (1969–1984)が、旅行記・日記・手紙などを駆使して作成したフンボルトの毎日の年代記Chronologie (2007年10月22日修正版)を、東西合併後のBerlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaftから出版している。これを利用してフンボルトの南米調査旅行を、次のように四つの地域に整理してみた(図3)。ヴェネズエラ・アンデス・メキシコのルートマップと記述は手塚の本に詳しく紹介されている(手塚 1997)。

### ①ヴェネズエラ・オリノコ川

1799年7月16日 クマナ入港 伝染病のため11月18日まで4ヶ月間クマナで足止め カラカス(2ヶ月18日滞在)などカリブ海沿岸の洞窟・地形観察観測と同時に、諸都市を視察 修道会・アシエンダ・総督などを訪問 11月4日クマナで地震を体験 11月11/12日流星を観察

1800年3月27日 この地方のカプチン派修道会本拠地San Fernando de Apure訪問(カプチンK apziner:カトリックの托鉢修道会 *Matthäus von Bascio*によって1525年にフランシスコ会から分かれて創立され、生活態度は貧困を信条としている)

2月7日 Apure川をさかのぼり さらにOrinoko川をさかのぼって 5月7日ブラジル国境San Carlos del Rio Negroのオリノコ川探検最南端に到着 オリノコ川上流部カシキアール Casiquiareがアマゾン川水系Negro川と分流によって接続していることを確認 オリノコ河床の隆起が原因と考えた オリノコ川を下りAngostura(現Ciudad Bolivar)へ そこから北へリヤノLlanos平原を横切ってNueva Barcelonaへ(図3)

### ②キューバ

1800年11月24日 Nueva Barcelonaよりキューバに向け出航

12月19日 ハバナ入港 キューバに2ヶ月15日滞在 多くの家族・人と知り合いとなる 四つの大農園Haciendaを訪問し 後の『キューバ島政治誌*Essai politique sur l'isle de Cuba*』の資料となる メキシコからフィリピンへ向かう予定を変更 南米の港でThomas-Nicolas Baudin船長の世界周航への合流に希望を託してペルーへ向かうことにする 採集した植物標本を、種がほぼ等分になるように三つの荷物に分け、一つはハバナに残し、他の二つはロンドンとパリ宛てに発送したが、途中で紛失した

1801年3月5日 カルタヘナへ向けてハバナ出航 3月14日キューバ島南岸トリニダードに寄港(図3)

### ③アンデス山地

1801年3月30日 カルタヘナ入港 7日間滞在 泥火山観察(詳細は『Kosmos』に記載) 4月20日 マグダレナ川を遡りコロンビアの首都サンタフェデボゴタへ出発 約2年にわたるアンデス山地の探検調査となる この日をもって著書『旅行報告*Relation historique*』は終了

6月15日 Hondaで船を下り、6月22日まで滞在し、サンタアナ洞窟調査 6月23日カヌーでLas Bodegitasへ、以後ボゴタまでは陸路、7月8日ボゴタ（海拔2548m）到着 50巻にも及ぶ南米植物誌を完成しつつあった大植物学者José Celestino Mutis家に宿泊 副王Pedro Mendinueta y Múzquizに何度も食事に招待される ボゴタ高原の高度測定と岩塩鉱視察 2～3の山に登り、滝の見学

1801年9月8日 ボゴタ出発 キトへ向かう

1802年からフンボルトの日記がドイツ語からフランス語に代わる

1802年1月6日 キト（海拔2812m）着 6月9日まで5ヶ月間留まり、町や周辺を巡検 4年前の地震で4万人が死に、復興途上にあった

有力な4家が並立していたが、そのうちの1家セルヴァ＝アレグレSelva Alegre侯爵家のキト郊外Chilloにある夏の別荘に泊めてもらい、その家の若い息子カルロス＝モントゥファールCarlos Montúfarを侯爵に頼まれてチンボラソウChimborazo火山（6310m）登山に同道させたり、以後パリまで同行することになる キト周辺の火山を沢山登り、北のピチンチャPichincha火山（4794m）には3回も登山 3月16日 Antisana山（5704m）登山 4月28日コトパクシCotopaxi火山（5896m）登山 6月5日岩石標本をパリ・マドリッド・フィレンツェへ発送

1802年6月9日 リマに向けキト出立 6月23日当時世界最高峰と考えられていたチンボラソウChimborazo火山（6310m）をBonpland・Carlos Montúfarとともに登山 130km北西のCayambe山（5790m）を遠望してスケッチ 3031 Toisen（フランスの長さの単位：1.949m）：5906mまで登ったとフンボルトは報告しているが、後にReinhold Messner とMarco Cruzの計測では5600mとさる（図5・6）

7月23日エクアドル南端Loja着 ボゴタで教えられたキナの木の子生条件と分布を詳細に研究するために7月28日まで留まる 道中インカの砦や道路を見る 9月13-18日カハマルカ温泉、ピサロによって殺されたインカ最後の王アタフアルパの宮殿遺跡を見る 王の子孫に会う カハマルカからは道は下り坂となりHuangamarca台地から太平洋を初めて見る 途中スペインによって破壊された干上がったインカの灌漑施設を見る 9月24日トルヒーリョ着、14日間滞在

1802年10月23日 ペルーの首都リマ着、1535年ピサロによって建設され、1542～1831年ペルー副王領首都であった 12月24日までの2ヶ月間滞在し、国立図書館で経済と鉱山の情報を得る 同時にCochabamba地方に関する探検家Thaddaeus Haenkeの旅行記を書き写す

1802年12月24日、リマの外港カヤオからエクアドルのガイヤキルヘスペイン軍艦「La Castora」で沿岸沿いに航行し、海流の温度を測定し、海水温が低いことを認識、後に「フンボルト海流」と呼ばれる所以

1803年1月4日 ガイヤキル上陸、2月17日まで滞在 内陸へ探検調査、コトパクシ火山の爆発の調査

## ④メキシコ

1803年2月17日 アカブルコ（メキシコ）へ向け出航

1803年3月16日 アカブルコ上陸 陸路15日かけてメキシコシティへ

1803年4月12日 人口13万のメキシコシティ到着 巡検を除くと1804年1月20日まで約9ヶ月滞在

5月13-26日 メキシコ最古の鉱山Pachuca、当時活況を呈していたReal del Monte・Morán鉱山へ続けて巡検

6月8日から副王庁図書館で、ミラノ人Lorenzo Boturiniの押収された手書き絵の収集に没頭

8月1日～9月末 灌漑施設視察のほか首都北西300kmにあるGuanajuato鉱山（図3）の詳細な評価をし、人生で最もきつい時期であったと書いている San José de Comanjillas温泉へ巡検

10月17日～21日 鉱山専門学校Colegio de Mineríaで授業をやったり、試験に参加したり、所長・大學創立者Fausto de Elhuyar（1755-1833）と知り合いになる 技師長Manuel Del Rio（1764-1849）はフンボルトと同様フライベルク鉱山専門学校で勉強したことがある同窓生

1804年1月9日、副王José de Iturrigaray（1742-1815）とともにメキシコ市の排水施設（Real Desagüe）を2回目の視察

1804年1月20日 ヴェラクルスへ向けて出立 2月19日～3月7日 ヴェラクルス滞在

1804年3月7日 スペイン軍艦「O」でハバナへ 3月19日 ハバナ着

1804年4月29日 貨物船「Concepción」でハバナを出航し、フィラデルフィアへ

5月20日 デラウエア川沿いのフィラデルフィア到着、途中嵐に遭い、1800年4月6日オリノコ川でボートが転覆し、溺死しようとしたときと同様に「人生最悪の日々」

約50日間のアメリカ訪問の後 1804年7月9日デラウエア河口出航 アメリカ滞在の一部はすでに発表した（佐々木 2007）。8月3日ボルドー上陸 5年2ヶ月ぶりにヨーロッパ帰還

8月27日パリ着

## V フンボルトの見た Nueva España

フンボルトは約5年間スペイン王国の植民地ヌエヴァ＝エスパーニャを、自費で、自由に、副王から奴隷にいたるあらゆる階層の人々をじっくりと身近に観察し、会話も交わしてきた。時局は中南米植民地がスペイン王国から独立闘争を始める直前の時期であった。かれが目にした様々な事象と率直な感想は、日記や親しい友達への手紙などでは記述したものの、自由な探検調査旅行の機会を与えてくれたスペイン国王への配慮から、反植民地的・反封建的記述は、帰国後の著作であっても、控えていた。

むしろ1808年3月8日 パリで書いた「新スペイン王国政治論Essai Politique sur le

Royaume de LA NOUVELLE—ESPAGNE] par Alexandre de Humboldt avec un Atlasの巻頭にスペイン王カルロス4世への献辞が次のようにある(図4)。

A SA MAJESTÉ CATHOLIQUE  
CHARLES IV,  
ROI D'ESPAGNE ET DES INDES.

近年、フンボルトの日記や親しい友人に宛てた手紙類が公表印刷されるにつれて、啓蒙的教育を家庭教師Gottlob Johann Christian Kunthから受けたことと、また21才でフランス革命1年後のパリを見たフンボルトにとって、スペイン王国植民地での、不公正と非道徳的なインディオや奴隷に対する植民地の伝道師・役人・地主などへの、厳しい嫌悪感にも似た感情が、明らかになってきている。その代表的なものが次のようである(Holl 2008)。

Humboldt, Alexander von: Kolonien (Reisetagebuch, Guayaquil (Ecuador), 4. Januar–17. Februar 1803. In:

Humboldt, Alexander von: *Lateinamerika am Vorabend der Unabhängigkeitsrevolution*. (独立革命前夜のラテンアメリカ)

*Eine Anthologie von Impressionen und Urteilen, aus seinen Reisetagebüchern zusammengestellt und erläutert durch Margot Faak*. Berlin 1982, S. 63–67.

Humboldt, Alexander von: *Über die Freiheit des Menschen. Auf der Suche nach Wahrheit*. Hg. Von Manfred Osten, Frankfurt a. M. 1999, pp. 121–125.

Humboldt, Alexander von: *Reise auf dem Magdalena, durch die Anden und Mexiko. Aus seinen Reisetagebüchern zusammengestellt und erläutert durch Margot Faak*, Bd. 1: Texte, Berlin 1986; Bd. 2: Übersetzung, Anmerkungen, Register. Übersetzt und bearbeitet von Margot Faak. Berlin 1990.

フンボルトの言葉で表現すると、「植民地が大きいほど、ヨーロッパ政府の支配力が徹底しているほど、植民地の非道徳性はより強固なものにならざるを得ない」。

「地球の物理」・「世界の理論」・「自然地理学」をフンボルトは同義語として使用しているが、これらの中には当然人間の観察も含まれており、全ての大陸での文化の進歩を信じていた。後に『コスモス』で論じているところであるが、「知ること Wissen、および認識すること Erkennen は、人類にとって喜びであり、また権利を付与されることであり、国富の相当な部分をなすものであり、時には自然条件が極めて悪いところでは、財を補うものでもある」。家庭教師Kunthに育てられ、1790年7月21才でパリでフランス革命直後を体験し、Liberté (自由)・Égalité (平等)・Fraternité (博愛)の精神を抱き、「全ての文化・宗教・人種・民族を尊重することによって、人類の一体化を志向し、すべては自由に対しては平等である」との世界観をもってい

た。革命の指導者らを個人的に知ってはいたが、独立闘争を煽るようなことはしなかったし、真の友達と日記以外に本心を吐露することはなかった。

### フンボルトの探検旅行者の特殊性

クック・ブーゲンヴィルなどのフンボルトに先行する探検航海者らは、他人から資金を提供されていたが故に、ある種の調査目的が課せられていた。フンボルトの場合は、母の遺産が入ったために、①自費による独自の研究旅行、②無条件の研究旅行の許可、を得ていた。かれの研究旅行は特定の国家のためではなく、かれ自身の言葉で言えば「自然科学の進歩」のためであった。スペイン国王の名で発給された旅券は、ヌエヴァ＝エスパーニャで副王・総監・長官・役人・聖職者・大農園主などにフンボルトへの助力や資料を提供させ、「決して、決して、一自然研究者がこのような自由を享受できることはありえない」と、フンボルトは旅行中に書いている。このような事情からフンボルトは旅行中も、ヨーロッパ帰還後の出版物でも、スペイン国王と植民地体制を直接批判することを抑えてきたと思われる。旅行ルート・同行者・交通手段、どれもフンボルトの自由な選択であった。アカプルコからメキシコシティへは測器や荷物が増えて21匹の駄獣を雇うことになった。

### 旅行中の植民地批判

ガイヤキルで書かれた分析とそのほかの多くのかれの旅行記の行間から窺える植民地批判は最高潮に達し、とくに聖職者・鉱山所有者・アシエンデ所有者・植民地支配官僚たちの社会的コントロールのなさをなじっている。罪を犯したわけでもないのに奴隷やインディオを虐待し、死に至らしめている。聖職者らがキリスト教の仮面をかぶって人類を不幸にしている。判事がいるわけでもないのに、黒人奴隷やインディオは25回のむち打ちを喰らって死に至る場合も多く、希望のないまま、今日から明日へと生きているだけである。メキシコでGuanajuato 鉱山を訪れたときのインディオ労働者の悲惨さについて、「自分の財産を奪われた、種族の不幸な末裔。全ての、全ての国民が全ての財産を失った例がどこにあるか?」。

身近に観察したり、現地人同士の会話・態度・伝聞などから、フンボルトはヌエヴァ＝エスパーニャには次の7つの人間社会階層があることを認識した。1 ペニンシュラール peninsular (スペイン本国人) 2 クリオールヨ criollo (現地生まれのスペイン人) 3 メステイーゾ mestizo (白人とインディオの混血) 4 ムラート mulato (白人と黒人の混血) 5 インディオ 6 サンボ Zambo (インディオと黒人の混血) 7 黒人奴隷

アフリカからの黒人について多くを観察し、拷問台で死に至る様をみて、「奴隷労働によるサトウとコーヒーの大農園栽培農産物をヨーロッパへ輸出して、アフリカ奴隷を輸入する三角貿易を止めなければならない」と書いている。「サトウキビの汁のしたたりは奴隷の血とうめきの結晶で、大奴隷農園の廃止がぜひ必要で、カトリックの国であるのになぜ法王の権威を（廃止のために）利用しないのか」など、革命は必要である、との信念を抱いていた。

5年2ヶ月に及ぶ南米旅行からパリへ帰還した翌年1805年に「植物地理学論 *Essai susr la géographie des plantes*」を出版し、その3年後1808年「自然の諸相 *Ansichten der Natur*」を

出版し、同じ年3月、フンボルト最初の政治論である前記「スペイン王国政治論」の第1分冊(図4)が出版されており、この書でもって近代地誌学が確立したとの説もある(Hanno Beck 1991)。Hanno Beckは「政治論」とは言わず「政治地誌」と呼んでおり、まさに地誌学書の嚆矢と言っても良いものである。ドイツ語訳は翌年1809年～14年にかけてTübingen Cotta社から「Versuch über den politischen Zustand des Königreichs Neu-Spanien」として5巻本で出版された。息の長い章や節は、自然環境から、大西洋と太平洋を結ぶ運河建設構想まで、今日の政治地理学地誌のプログラムを内包している。「スペイン王国政治論」は、15年後の1826年出版の「キューバ島政治論*Essai politique sur l'île de Cuba*」とともにフンボルトの自然観察のみならず、社会経済的分析の研究であると同時に、近代地誌学確立の書でもある。バルリン地理学会機関誌*Zeitschrift für allgemeine Erdkunde* N.F.1 (1856) 114ffの書評欄でフンボルト自身が次のように書いている。

「キューバ島政治論」は大著『南米旅行』の第三部、445-459頁に収録されており、アンチール諸島の農業と奴隷の状態を扱っている。またスペイン語に翻訳されて「*Ensayo politico sobre la isla de Cuba*」の表題で、英語へはニューヨークの書店Derby and Jackson社から八つ折り判の本で「*The Island of Cuba by Alexander Humboldt. With Notes and a preliminary Essay by J. S. Thrasher*」の表題で訳されて、しかも翻訳はスペイン語版からではなく、フランス語のオリジナルからの訳で、訳者は長らくその美しい島キューバに住んでいた者で、人口・農業・工業などの数値を新しいもので補足している。見解の異なるディスカッションではどこでも好意的に扱ってくれている。しかし、内的なモラルの問題として、1826年の執筆当時以上に燃えているところであるが、私の名前が付いた著作の中で、「政治論*Essai politique*」で終わっているスペイン語訳の全7章(p. 261-287 奴隷制度に反対している)が、独断でカットされているのを、残念に思わざるを得ない。

1808年9月26日発行の第2版で、350万人のインディオが白人および人間としての権利を付与されていないことに鑑み、「メキシコは本当に不平等の国である。集団としてのインディオを観察すると、大きな悲惨な絵以外のなにものでもない。非常に不毛な土地に、その性格からして無気力で、その上政治的位置づけから、土着の人々はただ今日から明日へいきているだけである。」「インディオの法的地位の改善の敵は、市民官僚・クリオーリョ・土地所有者であり、かれらのほとんどは野外での労働者が惨めであるほど、利益を得ている。」豊かな支配層と貧しく惨めな奴隷・インディオの二つの階層の差を縮めないで反乱が起きるかもしれないと、フンボルトは警告している。

1811年6月発行の版で、フンボルトは次のように書いている。「白人の幸せは銅色の人種と密接に結びついている。南北両アメリカで、虐げられてきた民族が、文明の進歩と社会秩序の完成化をもたらすであろう、すべての利益を共有するまで、永続的な幸せは来ないであろう。」

数ヶ月前の1810年9月16日、イダルゴ神父Miguel Hidalgo y Costilla（1753-1811）が革命の旗を掲げ、フンボルトと同じ身分格差の廃止とインディオの農奴制の廃止を要求した。

## VI 歴史の証人としてのフンボルトの価値

5年2ヶ月にわたる新大陸旅行から1804年8月27日パリに帰還した翌月9月から、旅行の成果をフランス学士院で発表を始めた。その南米調査旅行の成果は1835年の完成までには30年を要した。全三十四巻にわたる通称『南米旅行』、正式には『新大陸の赤道地域への旅行 *Voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent*』の2/3ほどが出版されたところで、純旅行記で、『新大陸の赤道地域への旅行報告 *Relation historique du voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent*』が第1部7巻として出版された。第2部（Zoologie）2巻、第3部（Nouvelle-Espagne）3巻、第4部（Astronomie）3巻、第5部（Pflanzengeographie）1巻、第6部（Plante Équinoxiales）18巻であった。『*Relation historique* 旅行報告』にはスペイン植民地で大きな独立闘争が起こっていることが記述され、「聖職者の支配体制が、長ければ長いほど、原住民を抑圧する道具となっている。新大陸のウィルダナーネスのなかに修道会組織を持ち込むことは、世代から世代へと時間が経つほどに、精神の発達を低下させ、民族間の交流を妨げ、魂を高揚させたり思考を広げるもの全てを、退化させる。」とある。奴隷制度に関してもフンボルトは記述の行間に、「啓蒙的な植民者は、不幸な奴隷達が農民・小作・土地所有者になることに、もはやなんの疑いももっていない。」と記している。

1821年、カラボボCraboboの戦いで勝利してヴェネズエラの独立を最終的に確実にしたボリーヴァル将軍が次のように書いている：「フンボルト男爵はアメリカでは人々の心の内では、いつもそこに居合わせている人である。人々は彼を、自分の目で知らないものを見、自分の筆で自然を全く美しく描く男として評価している。」ボリーヴァルはフンボルトとの一体感と同時に、フンボルトの著作からの知識、その影響力を、文章で表現している。1800年頃のスペイン植民地の人々の社会的状況を「瞬間撮影」のように描き、かつ解釈を下した旅行者の記述は他にはない。フンボルトは植民地主義に反対する態度を、1808年になって初めて公表したが、ラテンアメリカで独立闘争が始まる直前であった。1808年3月以来、フンボルトは公表した文章で解放闘争を好意的に扱い、そしてヨーロッパの卓越した賛同者として振る舞っていた。

フンボルトのボリーヴァル評を「フンボルトの談話集」（佐々木・田村 1986）から引用すると次のようである。ボリーヴァルの死後23年経った1853年、友達であり、かれの副官であったO'Leary将軍が、Clarendon卿の命令により、カリブ海Darién湾から太平洋への運河開削の可能性についてベルリンでフンボルトとの協議の後の談話である。「1804年にアメリカから帰還した後、私は彼とよく交流しました。彼の生き生きとした歓談、民族の自由への愛、輝くような想像力は、私に彼を夢想家のように思わせました。私は、彼がアメリカ十字軍の有名な指揮官になるとは決して思いませんでした。スペイン植民地に私が滞在している間に、一度も不満を感じたことはありませんでした。後に戦争が始まったときになって初めて、私には真相

を伝えなかったこと、愛慕ではなく深い憎悪が存在することを知りました。この憎悪が、報復や復讐の渦となって爆発したのです。しかし、私が最も驚いたのは、ボリーヴァルの輝かしい人生行路でした。1804年パリで彼と会って、翌年ローマで再会しました。そのときの彼の熱狂的な爆発を思い起こします。私はアメリカ社会のあらゆる階層と深く知り合っていたので、どこかに革命家が現れるとするならば、ヌエヴァグラナダであると思っておりました。ヌエヴァグラナダは18世紀末にある前兆が認められました。私の連れのボンブランは、私よりも洞察力が鋭く、彼は初めからボリーヴァルを好意的に受け止め、私の前でさえ彼を奮起させていました。ボリーヴァルがヴェネゼラ独立計画を知らせてきたので、彼がそれを実行したとしても決して驚かないことを、ある朝ボンブランが私に書いてきたことを覚えています。彼ボンブランは、若い人すべてにきわめて好意的な意見をもっていました。当時私には、ボンブランが訳の分からぬことを言っているとしか思えませんでした。思い違いをしていたのは彼ではなくて、私でした。なぜなら、私はずっと後になって、ようやくあの偉大な男について思い違いをしていたことが分かったからです。私は彼の偉業に感嘆しています。かれの友情は私にとって名誉なことであり、また、彼の名声は全世界のものです。」(原文はCornelio Hispanoが書いたスペイン語で、ドイツ語訳が併記されている)

1805年、新大陸旅行からパリへ帰還してまもなく、フンボルトは理工科学校で勉強していた22才のクリオーリョであるボリーヴァルと会って、「おっしゃるとおり、今やあなたの国は解放を手に入れる資格があると思います。でも、これほど大きな事業をなしとげられる人間が私には見あたりません」と言っている(ガスカール・沖田 1989)。ボリーヴァルを面前において、「大事業を成し遂げられる人を見あたらない」とは、その後10年経って「解放者」の称号を送られた人に対して大変失礼であり、歴史家、とりわけ中南米の歴史家は、このフンボルトの言葉の中に、ヴェネゼラ・コロンビア・ペルーを解放することになる人間ボリーヴァルに対する侮辱と見る者もいる。

フンボルトがメキシコ滞在中に副王に提出した「新エスパーニャ王国政治地理目録 *Tablas geográficas políticas del Reino de Nueva España*」はすぐに書き写され、植民地政府に利用されただけでなく、政府を転覆させようとする側にも利用された(Holl Frank 2008)。この統計は後にフンボルトの *Essai politique sur le royaume de la Nouvelle-Espagne* (図4)の基盤をなすものであったが、フンボルトが声高に言うことはしなかったが、新しいスペインが経済・科学・文化・社会的ポテンシャルにおいて独立するに十分成熟しており、スペイン王の監督なしでもやって行けることを、証明している。統計数値の入ったこの政治論は、1824年メキシコの憲法起草議会でも利用された。メキシコの歴史家にして政治家のLucas Alamánは1824年7月21日、フンボルトに宛てて彼の著書について次のように書いている：「メキシコの立派にして自由な憲法のすべての概念はあらゆる豊かな社会の要素を内包している。この書の教えるところは、多くの住民の間に芽生えてきた独立精神に貢献し、外国支配によってもたらされた無気力無関心を覚醒させるのに貢献した。(Frank 2008)」Alamánはメキシコに自由アメリカの自



然科学中央研究所を造ろうと計画したが、実現しなかった。

フンボルトと同様に立派な家庭教師シモン＝ロドリゲスによって若いときからルソーの思想を教え込まれ、クリオーリヨ上層階層のポリーヴァルは、フンボルトを「新世界の本当の発見者」、「そのアメリカに対する知識は、全ての征服者conquistadorがやったことよりも、より多くのよい影響をもたらした」と書いている。キューバの歴史家で哲学者のJosé de la Luz y Caballeroは1826年に「キューバの第二発見者」と呼び、フンボルトを、1492年に最初のヨーロッパ人としてキューバの地に入ってきて、近代の植民地主義の父であるコロンブスの上に、位置づけている。コロンブスはヨーロッパのためにアメリカを発見したのであるが、フンボルトにはどの国家に対しても義務はなく、費用も自分のお金で活動していた。フンボルトは独立した科学者として、どの人間にとっても基本的人権の確立と擁護に深い関心をもっていた。この民主的科学的認識でもって、フンボルトはヨーロッパ人として、アメリカ人のためのアメリカを発見した。ここにコロンブスとは違って、今日に至るまでフンボルトが新世界のあらゆる階層・集団から尊敬を受け、愛されている所以である。

フンボルト探検旅行200年祭を記念して、チリのサンティアゴで国際シンポジウムが開かれた。Manfred Kossok (In: Zeuske, Michael/Schröder, Bernd Hg. *Alexander von Humboldt und das neue Geschichtsbild von Lateinamerika*, Leipzig, 1992) は「フンボルトのどの著作も第三世界に関するもので」、一般に認識されている自然科学者および地理学者としてのみならず、現実には「植民地の歴史記述者」としてフンボルトを見なければならず、その政治的スタンスも考慮しなければならない、と述べている。

## Ⅶ おわり

Alexander von Humboldtの南米探検旅行とその著書、通称『南米旅行』のことは地理学専攻生なら知っているが、一歩中に入ると月単位くらいの旅行日程くらいしか分からない。フンボルトの手紙や日記が一箇所に揃っているわけではなく、東ドイツ時代にそれを揃えようと「フンボルト研究所 Alexander-von-Humboldt-Forschungsstelle der Deutschen Akademie der Wissenschaft」を設立したほどであった。研究してみて、感心し、教えられることはつきない中で、次の点がとくに印象が強い。

- ①飽くなき好奇心と探求心、それを支える強靱な体力。
- ②旅行のコースを臨機応変に変更できる頭の柔らかさと、それを可能にする豊富な人脈。
- ③スペイン国王の旅券入手までの人脈利用の抜け目なさと、測器準備の用意周到性。
- ④家庭教師Kunthから受けた啓蒙的教育とフランス革命をパリで若いときに見た体験。
- ⑤「世界一高い山に登った男」・「フンボルト海流」・フンボルトの名の付いた沢山の地名・切手銅像など、中南米では神様のように親しまれ、尊敬されているのは、独立直前という探検調査の時間的タイミングと、調査結果公表のタイミングが、独立を目指す闘士たちへの陰からのエールとなっていた。

## 【使用文献】

- 佐々木 博 (2009) : Alexander von Humboldt にとってのベルリンとパリ—生まれて故郷と科学する故郷の比較—. 目白大学総合科学研究紀要, 5, 1-15
- Holl Frank (2008) : Alexander von Humboldt—“Geschichtsschreiber der Kolonien”. In: Geothzeitportal. URL: 2008.9.7
- Biermann, Kurt-R. (2007): Alexander von Humboldt Chronologie. Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften. <http://www.bbaw.de>
- 佐々木 博 (2008) : Alexander von Humboldt のロシア探検. 目白大学人文学研究, 4, 75-95
- 佐々木 博 (2007) : Alexander von Humboldt のアメリカの大學に与えた影響. 目白大学文学・言語学研究 3, 95-21
- 二村久則・野田 隆・牛田千鶴・志柿光浩 (2006) : 『ラテンアメリカ現代史』. 山川出版, 430 頁
- ジョン=テレン・石島晴夫訳 (2004) : 『トラファルガー海戦』. 原書房, 302 頁
- 国本伊代 (2002) : 『メキシコの歴史』. 新評論, 402 頁
- 増田義郎 (2002) : 『アステカとインカ 黄金帝国の滅亡』. 小学館, 317 頁
- 横山和加子 (2001) : 新世界に富と故郷を求めて、16 世紀スペイン入植者とクリオーリョ社会の形成. 遅野井茂雄・志柿光浩・田島久歳・田島 高 (2001) : 『ラテンアメリカ世界を生きる』. 新評論社, 338 頁, p22-38.
- 宮本雅弘編 (2001) : 『図説 メキシコ』. 河出書房新社, 135 頁
- 手塚 章 (1997) : 『続・地理学の古典 フンボルトの世界』. 古今書院, 378 頁
- Margot Faak (1999) : Alexander von Humboldts Amerikareise. AvH-Magazin 73, 41-46.
- Edwards, J. S. (1999): Humboldt's South America Today. AvH-Magzin, 73, 47-52.
- 高橋 均 (1998) : 『ラテンアメリカの歴史』. 山川出版, 82 頁
- 染田秀藤 (1998) : 『インカ帝国の虚像と実像』. 講談社, 270 頁
- 国本伊代 (1992) : 『概説 ラテンアメリカ史』. 新評論社, 294 頁
- 下中 弘 (1994) : 『ラテン・アメリカを知る事典』. 第 6 刷, 543 頁
- 大井邦明・加茂雄三 (1992) : 『ラテンアメリカ』. 朝日新聞社, 251 頁
- Hanno Beck (1991) : Alexander von Humboldt: *Mexico-Werk. Politische Ideen zu Mexico. Politische Landeskunde*. Darmstadt.
- ピエール=ガスカール・沖田吉穂訳 (1989) : 『探険博物学者』. 白水社, 244 頁
- 西川 治 (1988) : 『地球時代の地理思想—フンボルト精神の展開—』. 古今書院, 202 頁
- 佐々木 博・田村百代訳 (1986) : Hanno Beck 「Alexander von Humboldt 研究史」および「Alexander von Humboldt の談話」. 人文地理学研究, X, 189-224.
- Hanno Beck (1982) : Zur Alexander von Humboldt-Forschung, Alexander von Humboldt-Stiftung Mitteilungen, 40, 31-38
- Wolfgang Schwarze (1977) : Kalender Alexander von Humboldt 1769-1859. Alexander von Humboldt-Stiftung, Bonn-Bad Godesberg
- Heinrich Pfeiffer hrg (1969) : Alexander von Humboldt Werk und Weltgeltung. R. Piper & Co Verlag München, 505 頁
- Johannes Paul (1954) : Abenteuerliche Lebensreise-Sieben biograophische Essays. (Seite 141-205 : Alexander von Humboldt: Ansichten der Natur) -Wilhelm Köhler Verlag Minden
- 飯本信之 (1937) : 『政治地理学研究 下巻』(両米編). 中興館, 732 頁



図1 ラテンアメリカの副王領 16～18世紀 (ラテンアメリカを知る辞典)

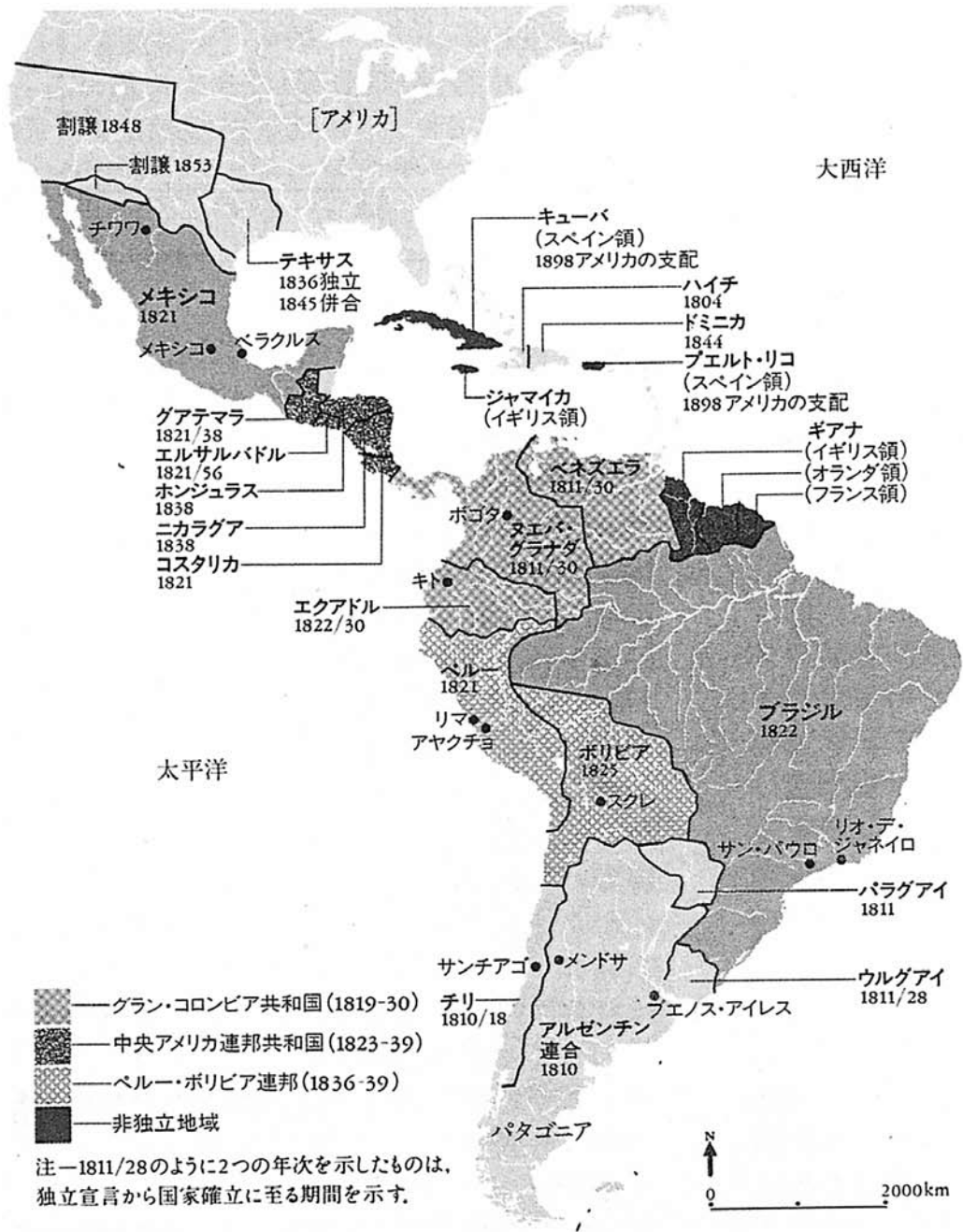


図2 ラテンアメリカ諸国の独立 19世紀前半 (ラテンアメリカを知る辞典)

Humboldt-Jubiläum

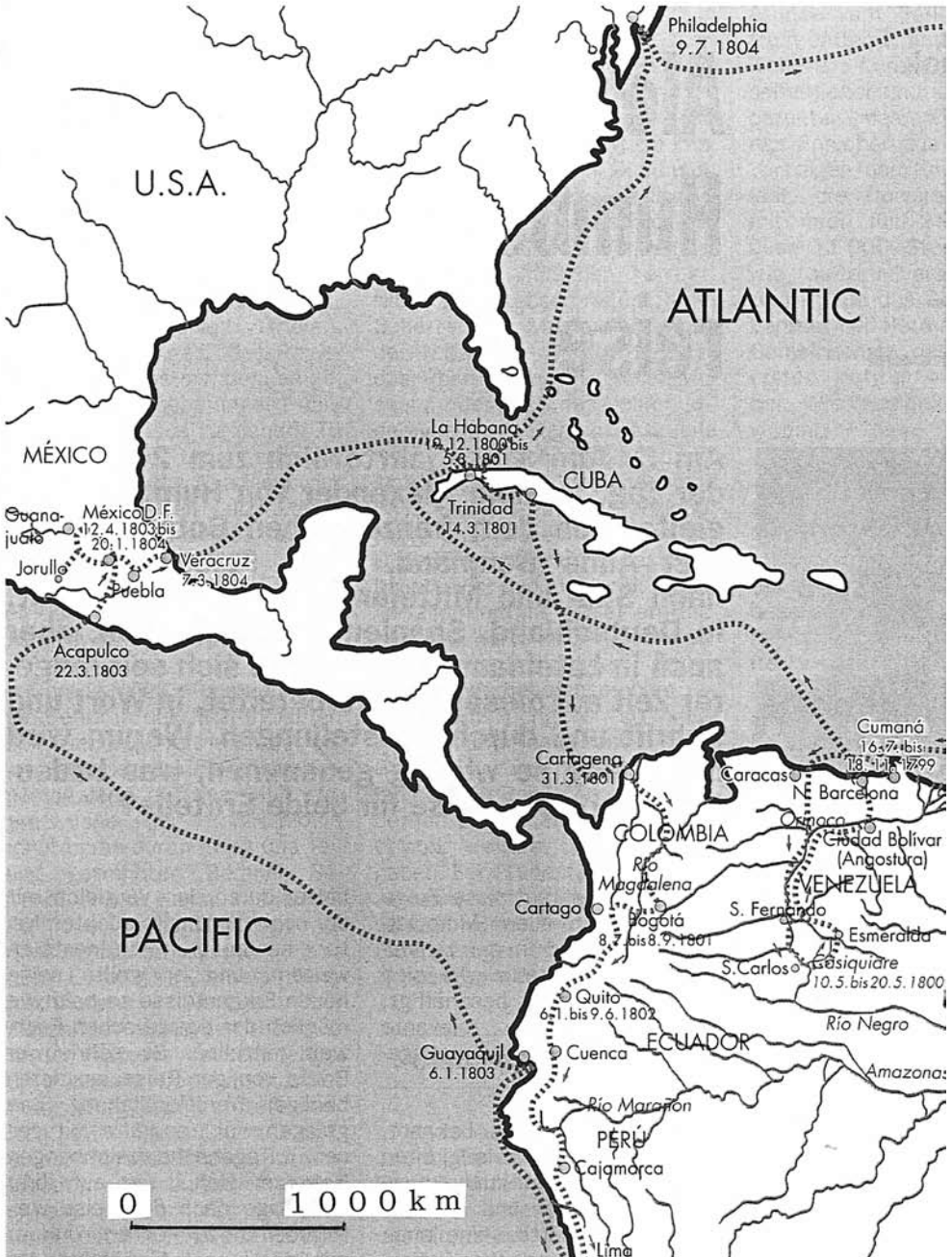


図3 Alexander von Humboldtの探検旅行ルート (Faak 1999)

ESSAI POLITIQUE  
SUR LE ROYAUME  
DE  
LA NOUVELLE-ESPAGNE;  
PAR ALEXANDRE DE HUMBOLDT.  
AVEC UN ATLAS  
PHYSIQUE ET GÉOGRAPHIQUE, FONDÉ SUR DES OBSERVATIONS ASTRONOMIQUES, DES MESURES  
TRIGONOMÉTRIQUES ET DES NIVELLEMENS BAROMÉTRIQUES.  
TOME PREMIER.  
A PARIS,  
CHEZ F. SCHOELL, LIBRAIRE, RUE DES FOSSÉS-SAINT-GERMAIN-L'AUXERROIS, N.º 29.  
1811.  
DE L'IMPRIMERIE DE J. H. STONE.

図4 『新スペイン王国政治論』表紙 (Theatrum Orbis Terrarum社, Amsterdam-1973-New York)

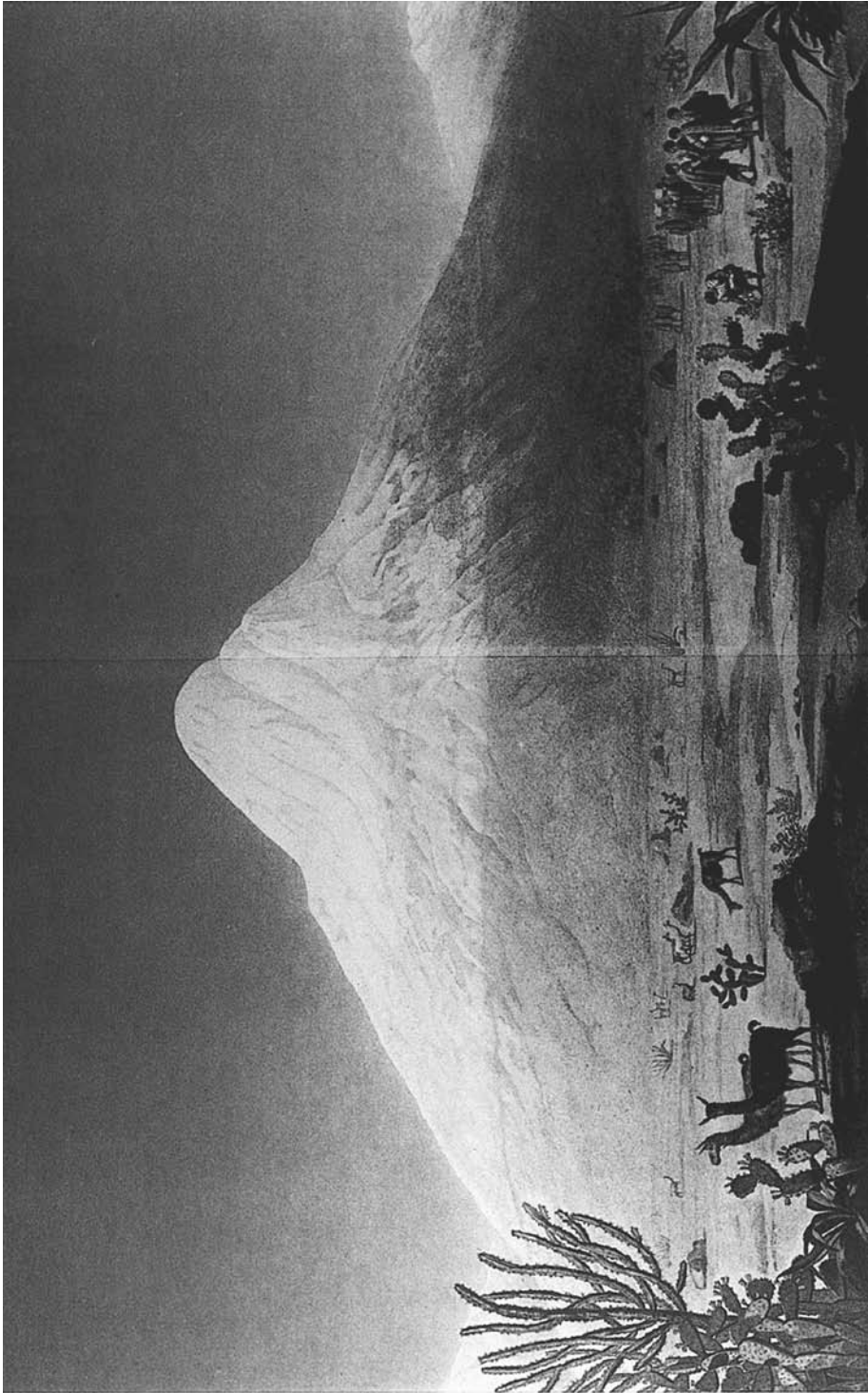


図5 チンボラッソウ火山 (6310m) (Hanno Beck 1982)

フンボルトらが登った翌日1802年6月24日、激しい降雪で覆われた山を描き、後に画家に手を入れて修正したこの絵を、『南米旅行』に2頁大で印刷した。左下のリヤマは「自然のまま」に描かれ、右下にフンボルトらが見える。(原図はカラー)

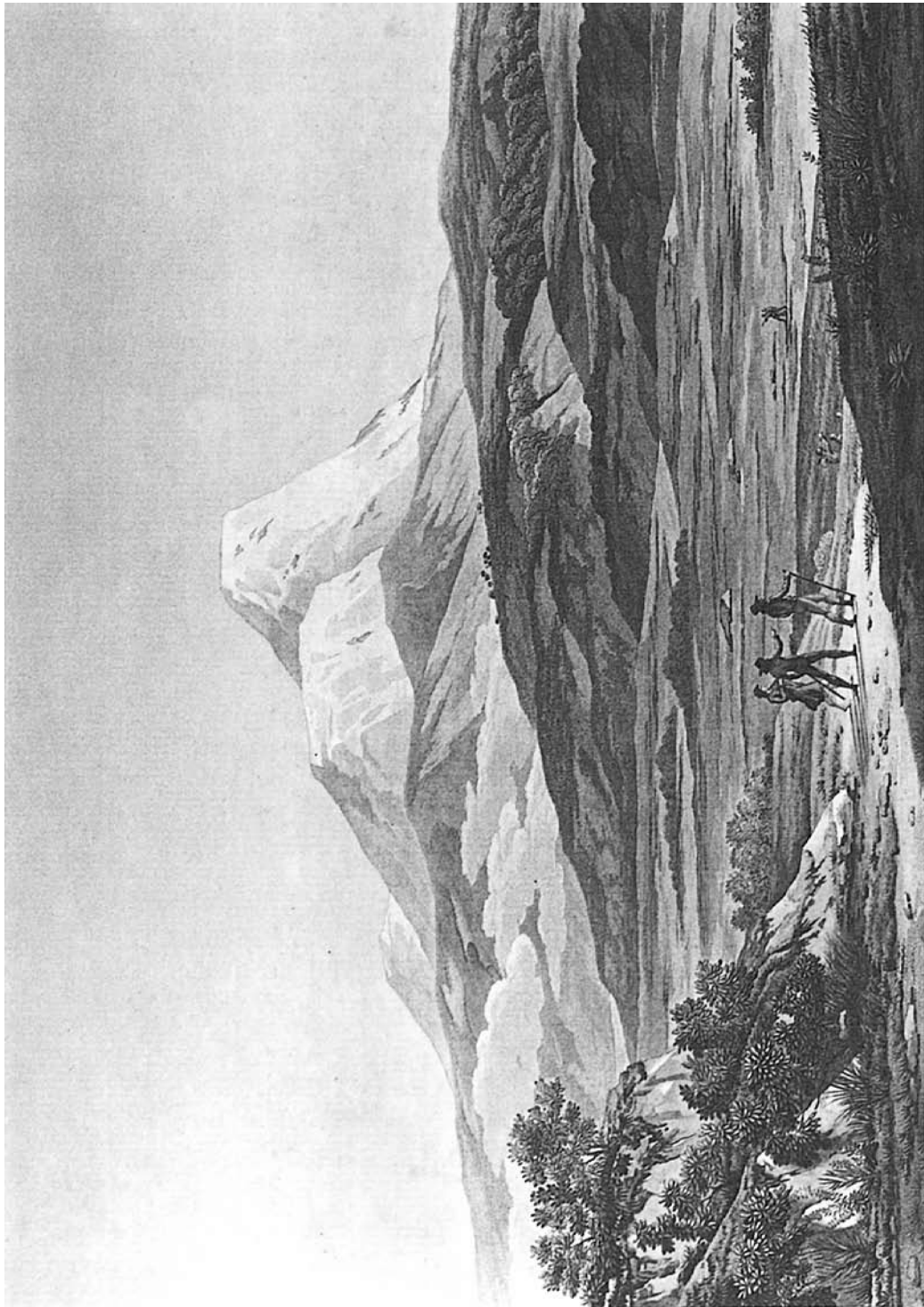


図6 Cayambe火山 (5790m) (Hanno Beck 1982)

首都リマ東北東60kmにあり、山体は円錐台形で、街を取り巻く万年雪で覆われた山々の中では、最も美しく、威厳に満ちている。130km南西にあるチンボラソウ火山からフンボルトは遠望した。フンボルトがスケッチした絵を石版画にしたもの。(原図はカラー)